

## 子どもの意識の連続性を基本原理とした生活科授業の改善

—生活科研究推進校の授業実践を手がかりにして—

The Improvement of the Life Studies Classes on the Basis of the Continuation of Children's  
Consciousness : Studying through the Practices of Life Studies Classes  
in the Research Schools

原 堅

(兵庫県加古郡播磨町立播磨西小学校)

### I. はじめに

小学校では、平成元年の学習指導要領の改訂に伴って登場した生活科が本年度より完全実施に移される。この生活科は、目標から具体的な活動や体験を重視する教科とされ、また、自分との関わりで自然や社会を捉えとともに自分自身への気付きをも重視する教科とされている。このような特色をもった生活科の授業とは、一体どのようにして行われているのか、また、自立への基礎を養うことにつながる具体的な活動や体験とは、どのようなものなのか、生活科の授業を行う上で直面する課題である。

一方、生活科に関する理論的研究として従来の理科・社会科の教科から捉えた研究や、カリキュラム研究などがある。また、実践的研究として各実践校による報告や雑誌等による個々の事例紹介など数多く見られる。これらの理論的・実践的研究では、生活科の教科としての性格から学習方法と学習内容について、それぞれの立場で実践研究を提示しながら論じられている。しかし、授業実践の基本となるような原理的考察がなされていないところに問題点が指摘できる。

ところで、全国各地の生活科研究推進校(51校)では、平成二年度に至るまでの三年間にわたって生活科の授業がどのようなものなのかについて実践的研究を積み重ねてきている。

そこで、本小論では生活科研究推進校の授業実践を活動素材と活動方法に基づいて分析する。そして、各授業実践の特性から導き出した基本原理をもとにしながら、実践化への意図を生活科授業改善案で提示するものである。

### II. 生活科授業実践における活動類型

研究対象にした生活科授業実践は、研究推進校による研究紀要・実践記録集で発表された215事例である。生活科の授業は、活動を基本として授業展開がなされていることから、活動内容に深く関わりをもつ素材と

方法に視点をあて類型を図った。活動素材については、自分自身・自然・社会<sup>1)</sup>の三つに分けることができる。さらに下位の素材について見ると自分自身に関する活動素材としては、成長・人間関係の二つに分かれている。自然に関する活動素材としては、環境・生物・現象の三つに分かれている。社会に関する活動素材としては、家庭・学校・地域の三つに分かれている。

活動方法では、活動素材に対して直接働きかけ、具体から出発する体験活動と、体験活動によって気付いたことがらを自己表出する表現活動の二つに分かれている。体験活動では飼育・栽培・観察・調査・探索・実験・採集・製作・遊び・交流<sup>2)</sup>などの方法があり、表現活動では言語・文章・絵画・身体による方法がある。

以上の視点に基づいて生活科授業実践の類型化を図り、事例数で示すと次のようになる。

活動方法 \ 活動素材	活動素材		
	自分自身	自 然	社 会
体験活動	25 事例	127 事例	120 事例
表現活動	25 事例	97 事例	113 事例

(実際の事例数 215事例と異なっているのは、自然と社会を重複した事例によるものである。)

この事例数全体を通して言えることは、体験活動においては、自然を活動素材とした事例数と社会を活動素材とした事例数が、ほぼ似通った数値を示している反面、表現活動においては社会を活動素材とした事例数が、自然を活動素材とした事例数よりも多い。また、生活科が体験活動によって知り得たことがらを表現するところに基本を置いて考えると、自然を活動素材とした体験活動と表現活動との差は、30事例あり、社会の7事例と比べて多いことがわかる。この原因の一つとして自然と社会の重複した事例が考えられる。

重複した事例を数えてみると体験活動では57事例もあり、表現活動に到っては22事例見られる。このことから、体験活動では、自然と社会の両者を活動素材としながらも表現活動では、そのどちらか一方による表現で止め置かれていることが理解できる。

本論では、事例数の最も多い社会を活動素材とした生活科授業実践を取り上げ、そこに見られる実践的特性を明示するとともに、特性を生かした授業改善案を提示する。

### Ⅲ. 社会を活動素材とした授業実践に見られる特性

社会を活動素材とした生活授業実践は、120事例であった。その中から、さらに下位の活動素材である家庭・学校・地域に分け、それぞれにおける典型的授業実践の特性を明示する。

#### (1) 家庭を活動素材とした典型的授業実践の特性

家庭を活動素材とした授業実践は11事例あった。その中から、長岡京市立長法寺小学校の「ぼくのかぞく、わたしのかぞく」<sup>3)</sup>の事例は他の事例に比べて家族の仕事と自分の仕事との両面に関わった活動展開がなされているため典型的事例として取り上げ分析を行った。

この單元では、家庭における家族のくらしを捉えさせるために、家庭生活の中の音に着目して取り上げているところに手法としての特性が見られる。家の人たちが出している音の中には、くつろぎの音、遊びや仕事の音などがあることに気付かせるために、時間と場所を視点としながら音調べをすることによって調査活動が探求的に行えるよう配慮がなされている。また、クイズ形式の方法を取り入れることによって、子どもたちの興味・関心をさらに高めている。このようなクイズ的遊びや時刻による仕事の分類を通して、音と仕事、音と時刻との関わりに気付かせたり、自分の家と友達の家との違いに気付かせたりしながら、自分の生活を振り返る出発点としている。

自分の仕事に関しても、家族の音調べから自分の音作りへと、子どもたちの意識の流れを誘発させる活動展開から自己の行為を促す活動展開へとつながっている。また、自分の仕事を家族との関わりの中で考えさせ、表現も多様な方法が使われており、子どもたちの主体的な活動の流れになっている。

#### (2) 学校を活動素材とした典型的授業実践の特性

学校を活動素材とした授業実践は17事例であった。その中から、神戸市立成徳小学校の「がっこうたんけんをしよう」<sup>4)</sup>の事例は他の事例に比べて子どもたちの興味・関心から探検活動が目的的活動として活動展開がなされているため典型的事例として取り上げ分析を行った。

この單元では、学校探検が子どもたちの願いにそった目的的活動として行われているところに特性が見られる。子どもたちは、自分たちの教室以外の場所に強い関心や好奇心を抱いている。そのことは、お昼の放送が始まると「どこで言っているの。」とか、休み時間職員室へ行こうとすると、「先生、どこいくの。」と話し掛けたりしていることからもうかがうことができる。このような子どもたちの実態からの疑問を投げ返してやることによって、子どもたちの意識に基づいた共通の問題として自分たちのまだ知らない所を探検してみようとなるのである。

このように、子どもたちの「探検したい」願いを基盤としながら、さらに活動が意欲的に行えるように探検隊のイメージにあった小物作りが行われ、子どもたち個々の思いが生かされた主体的な活動展開となっている。

#### (3) 地域を活動素材とした典型的授業実践の特性

地域を活動素材とした授業実践は92事例であった。その中から、大阪教育大学附属池田小学校の「わたしたちの町探検」<sup>5)</sup>の事例は他の事例と比べて子どもたちの思いを生かし、活動素材に幅をもたせた活動展開がなされているため典型的事例として取り上げ分析を行った。

この單元では、活動へのめあての持たせ方と自分の思いや、こだわりを追求する活動の構成がなされているところに特性が見られる。活動へのめあての持たせ方については、みんなで町を散歩する活動を通して、町の何に興味を持ったのか一人ひとりに決めさせ、これからの活動への動機付けがなされている。自分の思いやこだわりを追求する活動の構成については、探検活動にある。

探検活動が、駅周辺の散歩からスタートし、自己のめあてをもった探検活動、自己の思いを追求する探検活動、情報交換のための探検活動、家の近所の探検活動へと活動が展開している。つまり、これからの活動に対して目的意識を持たせる探検活動から出発し、目的意識にそった探検活動、さらに目的意識を深める探検活動、友達の思いと比較検証する探検活動、最後は一般化を図るための探検活動へと活動構成がなされている。

以上のように社会を活動素材とした典型的授業実践の分析結果から、子どもの願いや思いといった意識の連続性を基本原理としながら、素材が持っている特性を取り入れたり、活動展開の工夫がなされていることが理解できる。

次に、ここで明らかにした基本原理をもとに私の勤務校である播磨西小学校における生活科授業実践の改

善案を試みる。

#### IV. 基本原理に基づいた生活科授業の改善案

播磨西小学校において生活科に関する授業実践が行われ始めたのは、昭和61年度からである。その当時は社会科を中心とした合科的授業実践であった。そこで低学年社会科にも取り扱われていた内容の中から、子どもたちが最初に共同生活を営む場としての学校を取り上げ、改善案を提示する。

##### (1) 播磨西小学校「学校を探検しよう」における取り組みとその問題点

播磨西小学校「学校を探検しよう」の単元指導計画は17時間配当となっており、指導目標としては次の三点が挙げられる。

①入学後二ヶ月が過ぎ、学校生活に少し慣れた子どもたちが、目的的に学校探検をすることによって、自分たちが色々な施設や多くの人々の仕事のもとで学校生活をしていることに気付かせる。

②自分たちの五感を通して行う学校探検によって捉えたことを、各自の能力に即して効果的に表現できるようにする。

③自分たちの学校生活が、色々な人たちの仕事の上に成り立っていることや、自分が西小学校の一員であるという自覚をもつことによって、お世話になった人々に感謝しながら、積極的に学校生活を送ろうとする態度を養う。

このような目標を達成するために学習段階を四つのステップに分けて行っている。まず第一は、めあてをもつ段階である。これは、自分たちの現状を知り、各自の興味や関心が何にあるのかはっきりとつかませる学習段階である。第二は、計画の段階である。これは、各自の興味や関心に基づいためあてに向かって計画を立てる学習段階である。第三は、実施の段階である。これは、各自の計画にそって体験活動や表現活動が行われる学習段階である。第四は、評価の段階である。これは、体験活動によって知り得た情報をまとめ、お互いが交流することによって自己評価や相互評価が行われる学習段階である。

「学校を探検しよう」の活動展開をこの四つの学習段階にそって説明すると次のようになる。

めあてをもつ段階では、始めに西小学校のことで知っていることを出し合わせることによって、子どもたちにこれまでの学校生活を振り返らせる活動としている。子どもたちは、二ヶ月余りの学校生活を省みて、知っている先生の名前や場所の名前を話し出すがまだまだ知らない所や人が多いことに気付いていくのである。そこで、「知らない所を探検してみよう」という教師

の投げかけによって、子どもたちは探検という言葉からイメージが広がり、興味や関心を抱いていくのである。そして、自分がまだ知らない場所はどこなのか、また、どこへ探検に出かけたいのかといった各自のめあてが確認されるのである。

計画の段階では、全員で校内めぐりを行うことによって自分の興味・関心がどこにあるのか、めあての再確認がされている。各自のめあてが決まると、探検グループの作り方や教室の出入りの仕方などについて話し合いが持たれた後、同じ場所を探検する者同志が集まって探検の計画が立てられている。

実施の段階では、探検の計画にそってグループ探検に出かけ、特別教室や職員室などで見つけたことを、その場で発見カードに書き込んでいくのである。また見つけた物や名前や何のためにあるのかなどわからないところは、質問カードに書かせながら探検活動を繰り返すのである。

評価の段階では、探検活動によって知り得た情報をお互いが交換することによって、同じ場所を探検しても友達の気付きと自分の気付きに違いがあることや、表現の仕方にも違いがあることに気付いていくのである。ここでは、探検発表会を開く事前活動としてグループごとに探検活動に出かけた場所や絵や、そこで見つけたものの絵を書いたりする発表資料作りと、探検発表会をする活動として、探検活動でお世話になった人たちを発表会に招待して開くというものである。

以上のような活動展開で実施したところ、子どもたちの発表内容の多くが探検活動によって発見した「もの」であった。このことから、学校探検における子どもたちの目が学校の施設や設備に関するような「もの」しか捉えていなかったことがわかる。

そこで、学校を「もの」で捉えさせるためではなく、「人々」との関わりでとらえさせるためにごっこ遊びを取り入れたのである。これは、子どもたちの先生になってみたいという夢と、探検という言葉から未知への憧れとの両方を組み込んだものにしたのである。これによって、子どもたちの観察の視点が、従来の「もの」から「もの」と「人々」との関わりに広がると考えたのである。主な学習活動を段階ごとに示すと以下の通りである。

めあてをつかむ段階では、子どもたちに空き箱で作った学校の模型を見ながら、知っている所やまだ知らない所がどこなのか、お互いの情報を出し合わせている。そしてそこにいる人が誰なのかということを話し合わせるによって、学校には担任の先生以外にも多くの人々がいることに目を向けさせていくのである。子どもたちの目が人々に向けられていくと、今度は自分

がなっていたい人について話し合いを持ち、ごっこ遊びのめあてが確認されるのである。

計画の段階では、自分にながっていたい人が決まるとそれに合わせて探検の場所も決まってくる。探検する場所が同じ者同志でグループを編成し、具体的に探検の計画を話し合うのである。

実施の段階では、学校探検を繰り返しながら気付いたことをカードに記録し、それをもとにグループで学校ごっこに必要な小道具の準備や製作活動が行われている。

評価の段階では、グループごとに学校で働いている人を役割分担によって演じながら、それぞれのグループの良いところを話し合ったり、探検活動でお世話になった人たちにお礼の手紙を書いたりする活動が行われている。

以上の取り組みから問題点として二つのことが指摘できる。一つは、探検活動が本当に子どもたちの意識の流れにそった主体的な活動となっているのか、という点である。確かに探検という言葉からのイメージによって未知のことを探りたい欲求は、子どもたちの誰もが抱くことであり、興味付けにつながると考えることはできる。しかし、ただ単に学校探検をしようと投げかけるだけでは、校舎内の何を、どう探検すれば良いのかあまりにも漠然としているため、活動を引き起こし、活動が連続するような手立てに欠けているといえる。

二つには、探検する視点として「もの」と「人々」の両面から学校を捉えさせるねらいから、ごっこ遊びを取り入れることが適切であったか、ということが指摘できる。子どもたちは学校ごっこをする目的で学校探検を繰り返さようとするが、仕事と人を結び付けた学校ごっこを具体的にイメージし、役割演技によって表現することが困難である。ごっこ遊びでは、あくまでも遊びの世界であり、表面的な捉え方に陥り易いといえる。

## （２）「学校探検をしよう」の改善案

社会を活動素材とした授業実践における特性の中でも述べてきた長岡京市立長法寺小学校の事例を参考にして改善案を作成してみた。長法寺小学校を取り上げた理由としては、第一に音を素材とした探求的な活動によって「もの」と「人」と「仕事」を関連付けて学校を捉え易くなることが挙げられる。第二に、五感に働きかける活動素材によって子どもたちの意識の流れに合った主体的な活動が展開できると考えたからである。

「学校探検をしよう」の改善案では、入学後間もない一年生の子どもたちが普段の学校生活の中で耳にすることができる音や声を調べることによって、学校を

「もの」と「人々」との関わりでもって捉えさせようとするものである。そうすることによって、学校生活を送る上で必要な仕事があることに自分の生活との関わりで気付き、また人々の仕事によって学校生活が支えられていることや、自分も学校の一員であることへの意識をそだてることにつながると考えられる。そこで、この単元の目標を次のように設定した。

①学校生活の中で耳にすることができる音に目を向け、音調べをすることによって学校の人々が出している音の中には、遊びや仕事の音があることに気付くとともに、音ともの、音と仕事との関わりに気付くことができるようにする。

②音調べによって見つけてきたものを絵や文章に表したり、お話をしたりすることができるようにする。

③友達と協力して音調べをすることによって、学校生活を楽しく過ごすことができるようにする。

次に、これらの目標を達成するための指導計画については、子どもたちの意識の流れにそった形で活動が展開されているように単元を構成する必要がある。

そこで、単元構成に当たっては、イ)、ロ)の部分を導入の段階とし、ハ)、ニ)、ホ)の部分を展開の段階、ヘ)の部分を終末の段階として位置付けたのである。つまり、イ)、ロ)によってこれからの活動への意欲なり、目的意識なりを持たせるための段階から、ハ)では、目的意識にそった情報収集活動に熱中できる段階へ、そして、ニ)では活動によって獲得した情報の中から必要な情報を選択・整理する段階へと続き、さらに、ホ)では情報交換をしながらお互いの気付きを深める段階となり、ヘ)では気付きの確認をしながら活動のまとめをする段階へとつながる。

主な活動内容をもとにした単元構成は以下の通りである。

単元名「学校探検をしよう」（９時間）

イ) 学校の中の音探検の計画を立てる。（１時間）

- ・朝学校に来てから帰るまでに学校ではどんな音や声が聞こえるか考え、発表する。
- ・学校で音調べの計画を立てる。

ロ) 学校の中を音探検するために必要な物を作る。（２時間）

- ・音の探検隊に必要な物や事柄について話し合う。
- ・話し合ったことをもとにして準備物を作る。

ハ) 音探検に出かける。（２時間）

- ・学校の中の音調べをする。
- ・音調べをして見つけたことを探検カードに書く。

ニ) 学校の音のクイズを作る。（２時間）



- ・探検カードをもとに仕事の音と、それ以外の音と分ける。
- ・音のクイズを作る。

ホ) クイズを発表しあう (1時間)

- ・クイズを発表し、音当てゲームをする。
- ・音の聞き取り方や、場所による音の違いを見つける。

ヘ) 学校の音マップを作る。(1時間)

- ・クイズの絵を切り取り、場所によって分類する。
- ・分類したものを表にはり、音マップを作る。
- ・音マップを見て気付いたことを発表する。

このように音を活動の中核に捉えて単元構成及び主な活動を考えてきた。次に、これらの活動内容が単元の展開においてどのように活動間の関連を図ることができるかについて説明を加えていくことにする。

イ) の「学校の中の音探検の計画を立てる」では、学校ではどんな音や声が聞こえるか子どもたちの経験を出し合いながら、音の探検隊を編成して探検に出かける計画について話し合うのである。子どもたちが日々送っている学校生活の中には、クラスの中だけを見ても朝の放送の音やチャイムの音、勉強している音、遊んでいる音、給食の音、掃除をしている音など様々な活動によって音を耳にすることができる。

そこで、クラスの中でどんな音を耳にすることができるか発表させることによって、音に関心を抱かせるの音探しへと子どもたちの生活空間を拡大させるのである。それが、朝学校に来てから帰るまでに学校では、どんな音や声が聞こえるか考え、発表する活動である。これを行うことによって子どもたちに、自分たちの教室以外の場所についてあまり知らないことを自覚させるのである。つまり、ここで子どもたちは、自分の知っている現状を捉えることから出発して学校の中でどんな音があるのか探したい欲求や願いを持ち、それを解決するための音探検の計画を立てる活動へつながるわけである。

動へつながるわけである。

音探検の計画を立てる話し合いでは、探検に出かけるグループを編成するのである。一人ひとりが思い思いの場所に出かけていくのも一つの方法であるが、ここでは、数人の探検隊を編成することによって、同じ音を聞いても感じとり方が違っていたり、友達との協力も生まれたりするのでこの方が適切であると考えられる。

ロ) の「学校の中を音探検するために必要な物を作る」では、まず探検に出かける前に探検隊にとって必要な物について話し合いを行うのである。そして、話し合いによって決められた準備物を作製するのである。

音の探検隊にとって必要な準備物にどんな物があるか考えてみると、子どもたちは、探検隊という言葉によるイメージから探検帽子や、剣、双眼鏡、地図、メモなど色々な物が出されてくると思われる。

そこで、子どもたちのイメージから出された探検隊の必需品を意見交換することによって探検隊がなすべき目的を明確にしていくのである。そして、話し合いにそった準備物を製作することによって探検活動への意欲化につながるものと考えられる。つまり、ここでは言葉による無形の探検隊のイメージから、製作によって有形の探検隊を作り上げる活動といえる。また、探検に出かける時の規則的な内容については、子どもたちから出されてくれば別であるが、そうでなければ取り立てて話し合いを持たない方が、より主体的な探検活動が期待出来ると思われる。

ハ) の「音探検に出かける」では、子どもたちがそれぞれの思いで作った準備物を身に纏って学校の中を自由に出かけていき、音調べをする活動が展開していくのである。そして、発見したことをカードに記録しながら音による探検活動を探求的に繰り返していくのである。

子どもたちは、探検隊に必要な物を作り、それを身に付けることによって探検隊の一員になりきることができ、探検隊にふさわしい行動や意欲的な活動が期待されるのである。このように音の探検隊として学校の中を自由に音のする方へ出かけていき、どこで、どんな音がしているのか、何の音なのか調べていくのである。

給食室では、調理員さんが給食の準備をしている音や、職員室では、先生が印刷機を使っている音、電話の音、音楽室では、楽器を鳴らす音など様々な音を追求することによって、音ともの、音と人との関わりに気付いていくことができると考えられる。そして、ここで見つけた音や人、ものを探検カードに書き残していき、別の音のする方へ探検に出かけるのである。つまり、ここでは音による情報収集活動が探求的に繰り返されていることになるのである。

ニ) の「学校の音のクイズを作る」では、子どもたちが音探検によって集めてきた情報をもとにして、学校の音クイズを作る活動が展開される。子どもたちが集めてきた音の中には、仕事と関わった音、遊びの音、自然の音など様々な音があると考えられる。そこで、収集した音を学校の仕事の音に関係のあるものと、それ以外の音とに分けることによって、仕事と音、音と人との関わりを鮮明にすることができると考えられる。

次に、分類した音をもとにして音当てゲームをするための音クイズを作るのである。音クイズでは、音だけを書かせるのではなく、音のした場所や、その時の様子などの絵も合わせて描かせることによって子ども

たちの個性にあった表現につながると考えられる。

このように、ここでは前時の情報収集活動によって獲得した情報の中から必要な情報を選び出してゲーム遊びをするための準備としての製作がおこなわれるのである。

ホ)の「クイズを発表しあう」では、前時までに作ってきたクイズを音当てゲームにしてお互いが発表しあう活動である。

音クイズでは、遊びを取り入れた音当てゲームをすることによって、子どもたちの活動意欲を高めることにつながると考えられる。また、ゲーム的な遊びをすることによって、学校探検で見つけてきた場所の様子を身体を使って再現する子どもたちも表れてくると思われ、クイズ作りを生かした個性的な再現による交流活動につながると考える。この交流活動によって音の聞き取り方や感じ方の違い、場所による音の違いなど、音ともの、音と人との関わりに気付いていくことができると思う。

このように、ここでは情報交換活動をすることによって自分の気付きと友達の気付きとを比較することができ、自分が獲得した情報を確かめたり、新たな情報を得る機会としているのである。

ヘ)の「学校の音マップを作る」では、前時の音当てゲームで使ったクイズの絵を切り取り、場所による分類を行うのである。そして、場所ごとにクイズの絵を模造紙に貼りつけながら学校の音マップを作り、そこからの気付きを意見交流することによって、学校をものと人との両面から捉えようとするものである。

ここでは、今までに得た情報を場所によって分類した音マップ作りによって、音ともの、音と人との関係を明確にし、子どもたちの気付きを確かなものへと再確認させながら学習のまとめとしているのである。

以上のように音を中核に捉えて学校生活をものと人との関わり方の両面から捉えさせるための単元展開を計画してきた。活動素材としての音を取り入れることによって子どもたちの探検活動が意欲的に、且つ探求的に行われると考えたからである。

音にはその素材が持つ特性として、音のするところには必ず生活の場が存在していると考え、生活そのものが形を変えて表れているとすることができ、多様な生活が五感に働きかけていることを挙げるができる。この五感に働きかけることによって追求的な活動を可能にするのである。このように音の追求は、生活空間の広がりとなって子どもたちの意識の流れにそった活動を生み出すことができると考える。

そこで、課題としては、この改善案をもとにして実践研究を重ねることによって、各活動間の流れが子ど

もの意識の流れとどのように合致しているのか、その明確化を図ることである。

## V. おわりに

本小論では、全国の生活科研究推進校の授業実践を手がかりにして「学校探検をしよう」の改善案を提示している。しかし、生活科が求めている活動素材は、自分を含む自然や社会といわれるように限り無く広範囲にわたるものである。その中であって学校を活動素材とした生活科授業改善案を作成したわけであるが、今後は、これをはじめ数多くの授業実践を参考に学校教育現場において子どもたちの意識の連続性を基本原理とした生活科の授業を実践的に深めていくことであると考える。

また、多様な生活科授業実践の中から基本となるような原理的な研究を押し進めていくことである。

## < 注 >

- 1) 文部省『小学校学習指導要項』第2章の第5節に生活科の目標が掲げられており、そこから活動素材になる大きな枠組みを求めた。大蔵省印税局 1989.
- 2) 文部省『小学校指導書 生活編』教育出版 1989.
- 3) 長岡京市立長法寺小学校 「生活の研究」1990. 6. 20. pp.78~84  
家庭を活動素材とした11実践事例の中には、盛岡市立厨川小学校、水戸市立常磐小学校、岐阜県揖斐郡大野小学校、鳥取市立稲葉山小学校、姫路市立峰相小学校、仙台市立南小泉小学校、東広島市立吉川小学校、砺波市立出町小学校、浦和市立仲町小学校、愛知県御津南部小学校がある。
- 4) 神戸市立成徳小学校 研究紀要第3巻 1990.10.25. pp.87~97  
学校を活動素材とした17実践事例の中には、お茶の水女子大学附属小学校、高崎市立東部小学校、大阪教育大学附属池田小学校、静岡市立南部小学校、大阪府立五条小学校、松江市立竹矢小学校等がある。
- 5) 大阪教育大学附属池田小学校 「生活科の単元構成と実践」 1991.1.23. pp.45~53  
地域を活動素材とした92実践事例の中には、北海道教育大学附属函館小学校、金沢市立南小立野小学校、上越市立大手町小学校、福島市立福島第二小学校、天童市立山口小学校、宮城県加美郡鳴瀬小学校、秋田市立土崎南小学校、宇都宮市立緑が丘小学校、鈴鹿市立清和小学校、桜井市立城島小学校、和歌山市立広瀬小学校、徳島市立内町小学校、下関市立一の宮小学校、宮崎市立生目台東小学校、鹿児島市立西紫原小学校、那覇市立城西小学校等がある。